

精通したたての  
アナル凌辱  
5時間



エ  
ル  
フ  
君

メ  
ス  
イ  
キ

野  
外  
撮  
影

初  
毛  
ノ  
素  
人

— 成人向け —  
**R18**  
ADULT ONLY  
18歳未満  
購入・閲覧禁止

※注意書き※

本作はAVではなく、AV風のデザインに似せて作成された小説作品です。

本作はフィクションであり、現実世界の法律、倫理観とは異なる世界観のお話です。

日々の重圧で疲れ切った時に、  
ちょっとショタっ子に渴きを感じる時に、  
小生意気なガキをわからせたい時に、  
お気軽に本作品をお読みください。

サークルうつり猫・代表  
黒岑 竜一(クロミネ リュウイチ)

Twitter  
@kuromine\_a



Pixiv  
18977022

エルフ——といつても世の中には多種多様のエルフたちが存在している。

人間と同じように暮らす者、魔族と同等にアングラの世界で生計を立てている者、群れを嫌って自らが望むように生きている者……

自然の力や魔なるモノを宿す種族の一つとして、エルフという種族はこの世界で反映している。

「——風の精霊よ」

とある森の中にあるエルフの集落、その修練場で若いエルフの声が響き渡る。

「薫風そよいで、我が力にっ！」

周囲の風が彼の掌に集まり、球状の塊を創り出す、サイズは野球ボール程度のだが直撃すれば人程度は簡単に吹き飛ばされるだろう。

「むむむっ……も、もう少しっ……うわっ！」

彼はエルフというにはまだ成人しておらず、内面的にも外面的にも幼さが残る。そんな彼はゆっくりと風の玉を圧縮しようと試みるが、まだ力が足りていないの

か、風の玉は形を保てなくなって破裂する。

「また失敗かあ」

彼の名前はハヤテ、エルフの郷で自ら腕を磨いている有望な若者だ。彼はまだ成人してはいないが、同じ年代の中でも自然の力、特に風を操る力に関しては突出している。彼が今おこなっている修行も自然の力を攻撃に用いるための修行――郷の部隊に属する成人のエルフが行うものだ。

「っ……もつと、こう、ぎゅうつと圧縮するように……まだまだ！」  
才能なら上位に入るハヤテは焦っていたのだ。

「――郷長様！ どうしてオレを郷の部隊に入れてくれないんだよ！」  
「……」

数日前、彼は郷長が居る部屋に単身で乗り込み不満を述べていた。

「た、確かにオレはまだ成人の儀を通ってないけど、実力ならそこらの番兵より動ける、それに――」

「まだ未熟だ」

装飾の豪華な椅子に座り、雑務に対して気怠い様子で郷長は短い一言でハヤテの言葉を詰まらせる。その瞳はハヤテではなく、机に置かれた書類を憂鬱そうに

見つめていた。

「ハヤテ、お主の実力は機動力や応用力だけで見れば新兵と同等だ。だが決定的な差が一つ」

「まだ戦闘能力は、確かに、その……」

「それは磨いてゆけばすぐにでも追いつくだろう。だがお主に必要なのは己を知り、敵を知ることだ」

郷長の言葉にハヤテは思わず首を傾げてしまう。

「強さの過信——郷の外での任務には危険が伴うものが多い、その過信一つで自分はおろか味方まで危機にさらされる」

「……っ」

「若いのだ、お主は」

ふう、と郷長は書類を置き、ハヤテの前に立つ。

「外界に憧れを抱くのは良いが、生半可な力では失うものも多い……」

近くで見た郷長の身体には大きな裂傷、細かな刀傷があった。かつて郷長も凄惨な過去があったと両親から聞いていたが、その傷は相当な過去をものごとたっている。

「番兵を欺いたことは不問とする。その技量、しかと磨くように」  
「……は、はい」  
ハヤテはこれ以上の反論を口にする事ができなかつた――

◆ 1 ◆

(もっと強く、もっと強くならなとつ！)

自室でハヤテは一枚の写真を憧れの眼差しで見つめている。その写真の背景は『魔都』と呼ばれている外界の街並み、そしてその真ん中にコート姿で怪訝そうな表情を浮かべている獣人の女性が写っていた。

「いつかオレも、刑事さんみたく……強くなつて」

ハヤテがそう思っていると、自宅近くの通りから気になる話題が聞こえてくる。  
「――なあ、知ってるか？ 最近外界の魔都つてところで怪しい取引が行われてるつて噂だぜ」

「魔都お？ あそこは無法都市なんだから闇取引なんてしよつちゆうじゃないの？ 今どき珍しくもなんともないわ」

魔都の不穏性、危険性はエルフの郷にも伝わっているようで、一人の女エルフは退屈そうにそう返すが、男エルフは「ここからが本題よ」と得意そうにちつつと指を振る。

「最近様々な種族の子供が誘拐される事件とも関係性があるらしくてな、近頃外界の遊撃班が魔都の犯罪取り締まり部と合同捜査に乗り込むらしい」

「へえ、と、いうかどこから仕入れたのよ、その情報」  
「ちよつとしたツテがあつてな！ はっはっは！」

（その話、本当なら……）

そういつた任務の話を口外して良いものだろうか、ハヤテは冷静にそう考えたが千載一遇の好機でもある。もしこの話がデマでなく本当ならば、その任務の功績で郷長が認めてくれるかもしれない、魔都の刑事がオレを認めてくれるかもしれない、そう思ったハヤテはすぐに行動に移るため、残りの情報を集めつつ魔都へと向かう。

「——ここが魔都か。なんだかおつかないなあ」

エルフの郷からかなり離れた場所にある陸の孤島、ラシヨウ。様々な犯罪が横行し、はぐれモノやアングラな派閥、果ては巨大なシンジゲートまでもが台頭し

ており、魔が躍る都市という異名から『魔都』と恐れられている。

ハヤテが単独で捜査に来たのは、魔都の中でも娼館や奴隷市場などが連なっているエリアだ。

「お、ボウズ！ こづかい少ねえならアルバイトでもしてみないか？ たったの一時間だけでも稼げるぞお！」

「ご、ごめんなさいっ！ オレ急いでるんです！」

「フフ♡ 可愛い坊やね、こっちでお姉さんたちと遊ばない？ タダでも良いのよ？ お姉さんと気持ちよくなならないかしら♪」

「け、結構ですっ！」

「君は今どんなパンツを履いているのかな!? よかったらおじさんに見せてはくれないだろうか？ できれば買い取らせて——」

「ひいひいひいひいひいひいっ!!」

右を見れば怪しげな果物や葉、左を見ればほぼ薄布を纏って手足に枷を嵌められている女性、ディープに発光するピンクのネオン看板や変質者など、郷でぬくぬくと育ったハヤテにとって刺激が強すぎるものばかりだった。

（これが魔都っ……噂通りのおっかない場所だあ！）

進む道を塞いでくる客引きなどは、持ち前の風の力で軽くすり抜けていく。捕まってしまうっては一巻の終わりだろう。

「と、とにかく目的の現場はすぐ近くだし、目立たないように行動しないと」  
今度は意識を集中させて自身の周りに魔都で吹いている風を纏わせる。ハヤテが行ったのは周囲の風の流れに自分を組み込んで気配を薄くさせる技。あくまで完全に気配が消せたりするわけではなく、透明になれるわけでもない。

(よし、バレてない)

人々が感知する物体の影響による不自然な風の流れを『自然にする』だけ。ハヤテは魔都の建物の隙間に流れる風と流れを同化しているだけだ。派手な行動をせず、目的地に潜入し、身を隠すだけならば、未発達な技でも十分な効果を得ることが出来る。目立たず歩くだけならば、自身の横をそよ風が通り過ぎたと認識する程度までは感覚を阻害できるだろう。

「この路地裏で、取引が行われるのか」

人気のない路地、おそらく取引現場であろう場所にたどり着いたハヤテは廃屋の屋内で身を隠しつつ、消音機能付きのカメラを構える。

「……っ！ あの人」

廃屋の奥で身を潜めていると、怪しげな人物を視界に捉える。

「……」

フードから見えた白くて艶のある長い髪、纏っているローブには不思議な紋様が刺しゅうされており、その佇まいは落ち着いているが鋭い殺気が風に乗って僅かに感じてくる。

（女の人、かな……でも何か、イヤな感じが）

禍々しいというよりは寒波のような、痛々しい冷たさが頬を掠めてきそそうな程、静かで強烈なオーラ。証拠もない状態では帰れない、しかし捕らえて尋問何て出来るはずがない。ここはじつと耐え忍ぶしかないのだ。

「アンタが取引先の仲介人かい？」

暫く待っているとまた怪しげな男がその女性に話しかけてくる。

「……まあ、そんなところだ」

女性はふうと息を吐き、懐からディスクを数枚ほど取り出して、男にちらつかせると「おおっ！」と男は歓喜の声をあげる。

「先払いが原則だ」

「わかってますよ、おたくの信用は堅いからな。これで足りるか」

何かの商売なのか？ とにかく証拠を押しさえなければ。

「ありがとな、雇い主にもよろしく」

「雇い主では……まあいい」

(男が逃げる！ 追うべきか、いや……)

反射的に男を追いそうになるが、ハヤテは一度足を止める。事は慎重に、とにかくじっくりと、早とちりは禁物だ。とにかく今は周囲を確認するべきか、とハヤテの思考に迷いが生じる。

「——ふうん♪ こんなところで何をしてるのかしら？」

「ッ!？」

迷いの刹那、甘くて痺れるような香りと生き物のように絡みつくような声に思わず振り向いてしまう。

「あら、そんな顔で見ないで頂戴」

最低限の部位を隠す際どい衣服に悪魔がもつような翼と尾、そしてその種族の中でも上位ヒエラルキーを表す角、サキュバスだ。実物は初めて出会う。その妖艶で異質な様にハヤテは指すら動かせない。

「な、なんだお前っ！」

「それはこっちの台詞よ。エルフの坊やがどうしてこんなところにいるのかしらねエ……ワタシ、気になっちゃうなあ……♡」

「風よッ！」

何かされる。そう直感したハヤテがとった行動は攻撃だった。片方の手に風を集めて球状を削り出してさらに圧縮する。

「たあああッ！」

「——ッ!?!」

危機感によるものか、風の玉は一瞬でピンポン玉サイズまでの大きさに圧縮され、淫魔相手に即座に撃ち込まれる。至近距離からの一撃が淫魔に当たり、大きく砂塵を巻き起こす。

（手ごたえはあった！ 今の内に——）

「いったいわねえ……今のは何？ ちよつとびっくりしちやったじゃない」

しかし彼女は片翼でハヤテの一撃を防いでいた。淫魔はまるで遊んでいた小動物に噛まれてしまった時のように不機嫌に頬膨らませる。

「急に小さい弾が飛んでくるから避けられなかったわ」

（ぜ、全然効いてないなんて……）

ハヤテも気絶までとはいかないものの、逃走の隙を作ることはできたと思つていた。当の淫魔は微々たる驚きを見せるだけで、よろける気配もない。

「ひっ——」

敵わない、もう逃げよう——圧倒的な戦力差に怖気づいたハヤテは彼女に背を向けて逃亡しようとしていた。しかしそんな状態を彼女が見逃すはずもなく。

「逃がすわけないでしょ」

ふうつと淫魔がピンク色の息を吹き出す、それは先端が槍のように尖ってハヤテの身体を通り抜けると、彼の身体に電流のようなものが奔る。

「っあ!? な、あ……う、うごかないっ!?!」

魔力によるものなのか、彼女の能力なのか、彼の身体はピクリとも動かない。そして彼と淫魔の差は簡単に縮められ、彼女はハヤテの目を見てにっこりと微笑みかける。

「小さいのにやるわね。お姉さん惚れちゃいそうよ」

「だ、誰がっ、お前なんか……っ!」

かろうじて動く口で対抗するが、彼女には逆効果だろう。

「——何かあったのか? マーレ」

状況はさらに悪化する。もう一人、先ほどまで男と取引していたフードの女性がこちらにやって来ていた。

「クレイユ、こちらのエルフくんが私たちの取引現場を見ていたのよ」

「そうか……おい、お前。証拠は保存しているのか？」

フードを取り、クレイユという女性はハヤテに問う。

「ダークエルフ、なのか」

エルフ特有の耳に褐色の肌、そして僅かに感じる自然のエネルギー。

「質問しているのはこっちだ、記録媒体があるのなら目線で場所を示せ」

ハヤテの心は恐怖で一杯だった。それ故か、睨まれている彼は視線をクレイユから外せずにいた。

「……なら自分で探そう」

埒が明かないと悟ったクレイユはハヤテの衣服を漁り、簡単にカメラを見つけ出す。彼女は「これか」と不快感が混じる表情でカメラを踏みつけて壊す。

「お前には聞きたいことが多い。仲間は？ 誰からこの情報を？ 目的はなんだ？ それから——」

「ちよつとちよつと、一度に聞くのは可哀そうよ。といつても答える気が無い

ようだけど。それとも答えられる内容が無いのかしら？」

「……っ」

マーレという淫魔の言葉にハヤテの眉が動く。

「凶星？　だとしたらこの子から聞ける情報はないわねえ」

「独断か？　物珍しいヤツだ」

いっそ始末してやろうかとクレイユがハヤテの首に手をかけようとするがマーレが再び止めに入る。

「単独とはいえ、これから監視の目が厳しくなることは予測できる。なら、この子のでひとまず暇をいただきましようか♡」

「……稼ぎはどうする」

「他にもツテはあるわ。とりあえずは大丈夫でしょう」

マーレがそう言うときクレイユは少しばかり表情を歪める。

「術は解いてあげる。けど、抵抗はしないでね」

彼女が指でハヤテの額をはじくと、痺れていた身体が自由になる。けれどハヤテは逃げようとしなかった、次に逃げようと行動したのなら間違いなく殺されてしまうとわかっていたからだ。

「お、オレになにするつもりだ！」

「何するつもりい？ それはこれから教えてア・ゲ・ル♡」

悪戯な笑みを浮かべた後、マールはゆっくりとハヤテの下半身に手を添える。

「……」

そんなマールを見てクレイユは「またか」と呆れた様子で首を横に振る。

「良い子ね、ココを触られるのは初めて？」

「そ、そんなところっ、お母さんぐらいしかっ」

「ふウン、そう♪ それは光栄なことね。坊やの初めてになるなんて」

「うあっ」

太もも、臀部、そして股間に手が触れた時、ハヤテから弾んだ声が漏れる。

触られた部分がムズムズする。気持ち悪い、心地よいのにすごく怖い。

「やめっ、ンっ、うあっ！」

母親の時とは違う、お風呂で洗っていた時とも違う。ぞわぞわと、ふわふわと、得体のしれない感覚が彼を襲う。

「感覚が良いですね、それに可愛らしいおち○ち○が膨れてきましたよ」

触れられたハヤテの股間は次第に膨張していき、布にふっくらとした膨らみが

現れる。

「さて、汚れてしまう前に脱いでしましましょう」

「や、やめ——」

何とかして抵抗しようとして身体を振らせてみるが、それがかえってズボンを脱がす手助けをしてしまっている。ぴよこんと外へ飛び出した皮を被った未熟な勃起ペニスを見たクレイユとマールは、どこか感心した表情を浮かべる。

「形といい、大きさといい、将来有望ですね……はあ」

「どうして残念そうなんだお前は」

マールは少しだけ肩を落としながらも、彼のペニスを優しく握る。

「っひあ！ き、汚いところ、触るなあっ！」

「汚くなんかないわ。坊やの可愛い皮被りおち〇ち〇を……こうやって」

「やめっ——ふああああっ！」

手慣れた手つきにより露わになったハヤテのペニス、マールは外気に触れたその先っぽに軽く口づけをする。

「ぷりっとして、子供らしい弾力がありますねえ♡」

「そ、そんなところ、口つけるなあっ」

ハヤテの静止など気にも留めずにマーレはゆっくりと、丁寧に彼のペニスを指先でもてあそぶ。

「ビクビクってイキの良いおち○ち○ね、もう出そうなのかしら？」

「で、る……？」

「ええ、坊やおち○ち○から白いのがびゅーって出るんですよ」

マーレの説明にハヤテはさらに困惑する。

「おまえっ、なに言ってるのか……くうっ、わっかんないよ！」

「あらあら、触れられるのは初めてと聞きましたけど、まさかそれも初めてだなんて……これはとんだ拾いものだこと♪」

精通もしていないことがわかるとマーレの瞳の輝きが増す。

「その年で精通を知らないとはな、意外だ」

「あら、クレイユの時代では早かったの？」

クレイユは「まあな」と返しつつ、近くにあったテーブルに座る。

「やめてっ、おしっこ……でちゃうっ」

「いいのよ、出して、出しなさい。坊やの初めて射精とイキ顔をお姉さんたちに見せて頂戴♡」

マーレはにっこりと天使のような悪魔の笑みを浮かべて彼のペニスを手で擦り上げていく。初めての快感でパニックになっているハヤテは腰を前に突き出しながら大きく身体をよじらせる。

「あ、あ、ああっ、でちゃうっ！ おもらししちゃううううッ！」

そのままハヤテは情けない声を上げながら黄色の混じった精液が空を舞う。

「すごい量ね♡ そんなに気持ち良かった？」

「っは、はあ、あう……」

「シー……気持ち良すぎましたかね」

ダメだ。足腰に力が入らない、それに心臓もバクバクしている。

(なんだよこれえ……まだおち○ち○が、ビリビリするう)

「余韻に浸っている坊やを見るのも飽きないのだけど、誰かが助けに来る危険性もありますね……ここはひとつ」

マーレはふうつとハヤテの顔に息を吹きかける。すると彼の身体はすぐに脱力していき、意識が軽くなる。

「あ、れ……？」

「ここはひとつ、撮影場所を変えましょうか」